

無量壽經本願の一考察

柴 田 泰

1

浄土教思想の根幹は、彌陀如來の本願として示される念佛による衆生の浄土往生と云う事が出来よう。今回は彌陀如來の本願を説く事を主要として形成され、今日に於いて最も大きな比重を占める無量壽經を取上げ、その中でも中心となる本願文について考えてみることにしたい。

初めに無量壽經諸本についての概要を述べる必要がある。無量壽經の支那譯は古來より五存七缺十二譯と言はれ、十二の譯出がなされ、そのうち五本が現存し七本が失なわれて傳わっていない、と言われている。¹⁾ 今その十二譯を示すと次の如くである。

1. 無量壽經二卷

後漢桓靈帝の時 安息國沙門安世高譯建和二年（A.D.148年）より建寧三年（A.D.170年）の間の譯 七缺の第一

2. 無量清淨平等覺經

後漢 月支國沙門支婁迦讖譯 147年より186年の間に譯す 五存の第一（以後平等覺經と略稱）

3. 佛說阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經 吳 月支國優婆塞支謙譯 黃武年中（223年～228年）に譯す 五存の第二（大阿經と略稱）

4. 無量壽經二卷

曹魏 洛陽白馬寺に於いて印度沙門康僧鎧譯 嘉平四年壬申（252年）五存の第三（大經と略稱）

5. 無量清淨平等覺經二卷

曹魏 洛陽白馬寺に於いて西域沙門白延譯 甘露三年戊寅（258年）七缺の第二

6. 無量壽經二卷

西晋 沙門竺法護譯 永嘉二年戊辰（308年）七缺の第三

7. 無量壽至眞等正覺經一卷

東晋 西域沙門竺法力譯 元熙元年己未（419年）七缺の第四

8. 新無量壽經二卷

東晋 道場寺に於いて沙門覺賢譯 永初二年辛酉（421年）七缺の第五

9. 新無量壽經二卷

東晋 道場寺に於いて涼州沙門寶雲譯 永初二年辛酉 七缺の第六

10. 新無量壽經二卷

劉宋 沙門曇摩蜜多譯 宋元嘉元年（424年）より元嘉十八年（441年）に至る間の譯 七缺の第七

11. 大寶積經無量壽如來會第五之一二二卷

唐 南印度菩提流支譯 706年～713年 五存の第四（如來會と略稱）

12. 大乘無量莊嚴經三卷

趙宋 西天沙門法賢譯 982年～1001年 五存の第五（莊嚴經と略稱）

此等のうち第一の安世高譯は譯出者の傳記から考えてもその出典目録からも實際には存在しなかつたとされており、第十一譯の如來會、第十二譯の莊嚴經のみが成立年代が明らかに認められてい

るが、第二譯から第十譯までは実際に譯出されたのかどうか、或いは現存せる譯本が缺本に當るものではないだろうか…等々、成立年代・譯出者に関して種々の見解が述べられ定説は無い。²⁾ 此れはその資料となる開元録・歴代三寶紀・出三藏記集等の經錄の信憑性にも依るわけであるが、今回はその譯出者、成立年代に對する問題は論究せず、現存せる五譯のみを對象として各本の本願思想について考えてみたい。尚無量壽經には梵本、藏本も存在している。

扱て今日迄に考えられている無量壽經の現存せる諸本の成立過程についてはおよそ三系統の見解に分けられる。〔1〕大阿經→平等覺經→莊嚴經→如來會・大經。〔2〕大阿經→平等覺經→大經・如來會→莊嚴經。〔3〕莊嚴經のみを異系統とし他は〔1〕〔2〕とする。尚梵本藏本に關しても四十八願群の前と後の二説がある。木村泰賢・望月信亨・蘭田香勲・森二郎氏は〔1〕説を、鈴木宗忠・池本重臣氏は〔2〕説、南條文雄・荻原雲來氏並びに宗學者の諸師は〔3〕説とする見方が多い様である。³⁾

2

以上略述した無量壽經には夫々彌陀如來の因位に於ける誓願がある。平等覺經・大阿經は二十四願・大經・如來會は四十八願・莊嚴經三十六願・梵本四十六願・藏本四十九願として示される。夫々の願文について名稱は今日最も流布している大經に關しては淨影寺慧遠を初めとして中國・朝鮮・日本へと展開されるその時々宗學者によりその註釋書に種々の名稱を用いているが、⁴⁾ 他譯に關しての註釋書は少なく各願文の名稱も定まつていないわけではない。従つて大經に於ける名稱を基準として他譯の各願文を相應させる事により各本の特色を考えて行こうと思う。

各經願文の基礎的な検討を行つた後に⁵⁾ その對照表を大經四十八願を基準として擧ぐると次の如くである。

無量壽經諸本本願比較對照表

	平等 覺經	大阿 經	大經 如來會	莊嚴 經	梵藏 本		平等 覺經	大阿 經	大經 如來會	莊嚴 經	梵藏 本
(1) 無三惡趣願	1	1	1	1前	1	(22) 必至補處願	20	-	22	15後	21
(2) 不更惡趣願	2	8	2	-	2	(23) 供養諸佛願	22前	13前	23	17	22
(3) 悉皆金色願	3	15前	3	2後	3	(24) 供具如意願	22後	13後	24	-	23
(4) 無有好醜願	4	9	4	-	4	(25) 說一切智願	24	16	25	18	24
(5) 宿命智通願	5	22	5	4	6	(26) 那羅延身願	-	-	26	22前	26
(6) 天眼智通願	6	17	6	5	7	(27) 所須嚴淨願	-	-	27	-	27
(7) 天耳智通願	9	17	7	-	8	(28) 見道場樹願	-	-	28	-	28
(8) 他心智通願	7	10	8	6	9	(29) 得辯才智願	-	-	29	(23)	29
(9) 神足智通願	8	17	9	3	5	(30) 智辯無窮願	-	-	30	-	(30)
(10) 漏盡智通願	10	11	10	2	10	(31) 國土清淨願	-	-	31	25	31
(11) 住正定聚願	11	-	11	7	11	(32) 寶香合成願	-	-	32	24	32
(12) 光明無量願	13前	24前	12	-	13	(33) 觸光柔軟願	13後	24後	33	26	34
(13) 壽命無量願	14	19	13	-	15	(34) 聞名得忍願	-	-	34	-	35
(14) 聲聞無數願	12	20	14	-	12	(35) 女人往生願	-	(2中)	35	(27)	36
(15) 眷屬長壽願	15	21	15	11	14	(36) 常修梵行願	-	-	36	-	(37)
(16) 無諸不善願	16	-	16	12	16	(37) 人天致敬願	-	-	37	29	38
(17) 諸佛稱揚願	17前	4前	17	-	17	(38) 衣服隨念願	-	-	38	(30)	39
(18) 念佛往生願	17後	4後	18	-	19後	(39) 受樂無染願	-	-	39	31	40
(19) 來迎迎接願	18	7	19	13	18	(40) 見諸佛土願	-	-	40	-	41
(20) 殖諸德本願	19	5	20	14	19前	(41) 諸根具足願	-	-	41	22後	42
(21) 三十二相願	21	15後	21	15前	(20)	(42) 住定供佛願	-	-	42	34	46

(43) 生尊貴家願	-	-	43	44	(56) 說經殊勝願	-	18	-	-	-
(44) 具足徳本願	-	-	44	33	45	(57) 眷属光明願	-	23	-	10
(45) 住定見佛願	-	-	45	32	43	(58) 善根周徧願	-	-	-	8
(46) 隨念聞法願	-	-	46	-	47	(59) 二乗佛事願	-	-	-	9
(47) 得不退轉願	-	-	47	-	48	(60) 佛加教化願	-	-	(22後)	16
(48) 得三法忍願	-	-	48	36	49	(61) 往他供佛願	-	-	-	19
(49) 飲食自然願	23	14	-	-	-	(62) 不往供佛願	-	-	-	20
(50) 無有女人願	-	2前 ^ア	-	-	-	(63) 佛加供佛願	-	-	-	21
(51) 轉女成男願	-	2中	(35)	27	-	(64) 二乗成佛願	-	-	-	28
(52) 悉皆化生願	-	2後	-	-	-	(65) 作服往生願	-	-	-	30
(53) 資具自然願	-	3	-	-	-	(66) 隨意修習願	-	-	-	35
(54) 諸行往生願	-	6	-	-	-	(67) 華雨樂雲願	-	-	-	33
(55) 敬愛無嫉願	-	12	-	-	-					

※以下に記される () の番号は本表の願名を示す。

此の様に配列した場合、およその見當として次の様な事が判明する。

先ず大經と如來會は思想の深淺は別として配列順序が全く同一である事が判明する。同様に梵本と藏本とは梵本に三十二相願・智辯無窮願・常修梵行願が缺けている丈で他はすべて同配列である。また大經・如來會と梵藏本は内容的に類似と云う點で二三の移動を認めた場合には、(5)～(10)は六神通であるから一群と考え、(12)～(15)は如來・眷属並びに光壽の點で、(42)・(45)は住定の點で配列の順逆は認められるから、問題は梵藏本第二十五願・第三十三願の二願と(18)～(20)の二點にしぼられる。特に生因願として念佛往生願・來迎引接願・殖諸徳本願の四十八願群に於ける支那譯と梵藏本の相違は留意すべき點である。此の點に關して泉芳璟氏は“大經より判斷して現存梵本第十九願は梵文寫筆者の二回の脱漏と一回の誤寫による”と解釋されている。その反論として西尾京雄氏は支那譯諸本及び悲華經等の關係經典を對照として現存梵本はそのまゝの形が正しい、とされている。泉氏は更にそれに答えて大經を標準とした自己の解釋を主張されている。比較的新しいものでは池本重臣氏は梵本の形態を最新と規定した上で大經第十八・二十願を梵本第十九願は包攝した形態と解釋されている。⁶⁾ 大經・如來會と梵藏本とは此の様な難點を残すとは言つても他の各願文は一致していると考えられるから、同一系統の經典と規定して間違いは無い。但しいずれが形態的に先んずるかは願文のみで判斷する事は出来ない。

此の様に大經・如來會・梵藏本は一應四十八願群と看做す事は可能であるが、それでは二十四願を説く大阿經・平等覺經についてはどの様な事が判明するであろうか。兩經の願の名稱を一見して大經との關連性がより強いと気付くのは平等覺經である。その配列はほぼ大經と同じであり、四十八願中の前半に當る第二十五願迄に収められている。然るに大經に於いては獨立している願文が平等覺經では併合願として三願示され、本經独自の願文が第二十三飲食自然願のみである事を考えても大經・如來會の未發達の形態である事は明瞭である。同じ二十四願を説いても大阿經は四十八願群と異なる所は大きいし独自の願文も多く、僅かに飲食自然願並びに併合願の内容に於いて平等覺經との相似性が認められる。

莊嚴經については、別に發表した如く、四十八願群との關連性はみられるが二十四願群との關連性は薄く・平等覺經二十四願が莊嚴經第十八願迄にしか収められていない點から、四十八願群の後の形態と考えられる。⁷⁾

以上の全體的見地からの推論として概略ではあるが夫々に關連性が見られる事により同一系統の經典と看做し、先ず大阿經が最も古い形態であり、次いで平等覺經、更に飛躍的に展開されて大經・如來會・梵藏本が形成され、莊嚴經が最も新しい形態として形成されたと考えられる。

3

それでは各經典の本願思想の特色は何であり、どの様な展開を示しているのかを各願文について検討を進めていく。此の點に關しては各經独自の願文は比較の對照を他に待つべき外の何ものもないから、先ず各經共通の願文について取り上げよう。

先ず願文に於ける法藏菩薩の誓いと願いを示す冒頭と最終部の表現は「使某作佛時…不得是願終不作佛」(大阿經)「我作佛時…我不作佛」(平等覺經)「設我得佛…不取正覺」(大經)「若我成佛…不取正覺或いは不取菩提」(如來會)「世尊我得菩提成正覺已…悉皆令得阿耨多羅三藐三菩提」(莊嚴經) “Sacen me bhagavan bodhiprāptasya…mā tāvad aham anuttarāṃ saṃyaksambodhim abhisambhudyeyam” (梵本)と莊嚴經の最終部が衆生の成佛を説いている外、他はすべて法藏菩薩の誓願として示される。

誓願の對象により淨影寺慧遠は大經四十八願を攝法身願・攝淨土願・攝衆生願に分類しているが⁸⁾此の點を考慮に入れて考えると、先ず(1)～(4)の各願文を見るに大阿經は第一・八・十五前半・九願と全く離れて示されており、(1)(2)共「泥犁禽獸薜荔」の語を用い、(2)～(4)は「我國中諸菩薩」を誓願の對象として説いている。平等覺經は四十八願群と同列であるが、(1)(2)「地獄禽獸餓鬼蜎飛蠕動之類」の語を用い、(2)～(4)「我國中人民」を誓願の對象とし、大經・如來會は明確に「地獄餓鬼畜生(趣)」「三惡道」の語を用い、「國中人天(衆生)」を對象としている。六神通に關しては大阿經は第十・十一・十七・二十二願と分離され、特に第十七願は如來を對象とし、他は「我國中諸菩薩阿羅漢」を對象として説かれるが、平等覺經では六願共“淨土に來生する人民”に統一され、四十八願群も同様である。(11)は大阿經に見られず、平等覺經に於いて初めて「住_レ止盡般泥洹_レ」と述べられ、大經に至つて「住_レ定聚_レ必至_レ滅度_レ」と展開されている。此の(正)定聚を淨影寺慧遠の「三賢と十聖」の階位とするなら、如來會は「決定成_レ等正覺_レ證_レ大涅槃_レ」と高められ、莊嚴經では「住_レ正信位_レ離_レ顛倒想_レ」と階位を問はない“正定聚”の表現を用いている。(12)(13)は如來の光壽無量の特相を明かす願文であるが、大阿經では第十九・二十四(前半)願と離れ、更に第二十四後半に光明の勝相を説く。平等覺經になると第十三・十四願と続き、兩經とも「諸天人人民蠕動之類」による如來の特相を表現するが、(尚、兩經共成就文では如來の入滅を説く)大經如來會は攝法身願として如來自身を對象とし、その表現は簡潔であり、如來の入滅は説かれていない。莊嚴經は衆生の光壽無量の特相として説かれる。(14)(15)の眷屬に關しては眷屬長壽願で平等覺經・大經・如來會に「除_レ其本願修短自在_レ」(大經)の點で共通點が見られる。無諸不善願は大阿經無く、平等覺經・大經・如來會共短かい表現であるが莊嚴經はその表現が複雑である。

扱て、諸佛稱揚・念佛往生・來迎引接・殖諸德本願の四願についてであるが、此の四願は本願文の中でも生因願としてその占める比重は最も大きく、また念佛往生願を中心として今日に至る迄の淨土教思想史は此の生因願に解釋がしばられて展開されたと考えても過言では無い位種々の見解がなされている個所であるが、今は無量壽經諸本のみを問題として考える。此の點に關して古くは荻原雲來氏、近年では池本重臣氏・崗田香勲氏の著書がある故⁹⁾それらを参考に私見を述べようと思う。先ず二十四願經について見れば兩經共、諸佛稱揚・念佛往生願は一願として示されている。大阿經では第四願「令_レ我名字皆聞_レ…佛國_レ皆令_レ諸佛…説_レ我功德國土之善_レ諸天人人民蜎飛蠕動之類聞_レ我名字_レ莫_レ不_レ慈心歡喜踊躍_レ者_レ皆令_レ來_レ生我國_レ」平等覺經は第十七願「令_レ我名聞_レ…佛國_レ諸佛…歎_レ我功德國土之善_レ諸天人人民蠕動之類聞_レ我名字_レ皆悉踊躍來_レ生我國_レ」と同じ内容表現である。更に兩經共此の願文と成就文は存在しない。此處で注意を引く事は「諸佛の稱揚する如來の名

字を聞いて踊躍し來生すると言う「聞名」の語を示す事である。聞名往生の思想は四十八願經には多く示される思想であるが、明確ではないにしてもその萌芽が初めて示される個所であり、と同時に四十八願經に表わされる念佛往生思想は全く汲み取る事は出来ない。大阿經では引續き第五願“天人民及蝸飛蠕動之類で若し前世で悪を作す者”第六願“若善男子善女人で在俗の者”第七願“沙門と作れる者”の往生即ち三輩往生の思想を示すが、平等覺經では第十八願“菩薩道を作す者”第十九願“前世に悪を爲す者”の往生と、二種の機類の往生を説いている。そして兩經とも下輩の願文に「聞我名字」の語が示される。尚、此等願文の成就文は三輩往生として明確に非常な長文で説かれている。以上の諸点により二十四願經に於いては生因願として重要なのは大阿經第五・六・七願、平等覺經第十八・十九願なのであり、(18)に相當する願文には生因の色彩が殆んど示されていない事が判明しよう。此れが四十八願經になると諸佛稱揚・念佛往生願は各々獨立した願文を形成する。大經では聞名の語は見え「至心信樂欲生我國乃至十念」と言う念佛往生を説き、如來會は「聞我名已所有善根心心廻向願生我國乃至十念」と聞名を示しつつ念佛を説いている。兩經には二十四願には説かれなかつた兩願文の成就文が示されているが、いずれも併合願的色彩を帯びた文脈を示しており、願文と成就文とはその展開に於いて多少の違いがある事が判明する。第十九・二十願は兩經共平等覺經の色彩をそのまま受けているが、明確な二輩の差別は平等覺經感じられない。然るに兩願文の成就文は二十四願經と同じく三輩往生の思想が説かれ、特に大經には「上輩」「中輩」「下輩」の語があり、如來會・梵(藏)本は衆生に約して説かれている。以上の如く生因願に関しては大阿經では第五・六・七願でその内容は三種の機類の夫々の修行による往生であり、平等覺經では第十九・二十願と二種の機類の往生となり、大經・如來會に於いて新たに第十八願が生因願としての様相を強く表わし、第十九・二十願に於いても諸行往生を説くと言つても二十四願經に見られるが如き明確な機類の差別は薄れて來ている事が知られよう。

三十二相願については大阿經のみ悉皆金色願との併合願であり、他譯は差異は無い。必至補處願は住正定聚願と同様に大阿經にみられず、平等覺經では「不生等置是餘願功德」(淨土宗全書一卷63頁)「一生等ならず、是の餘願の功德を置く」(淨土教之研究148頁)と訓讀が異なり、「一生等」の語が大經・如來會に示す「一生補處」であるのかどうか明確さを欠いている。「菩薩の中で衆生の爲に教化する者を除く」と言う文章は四十八願經に於いて初めて示され、本願思想の單に如來のみでない他の諸菩薩にも認める多様性が窮はれる。(23)～(25)は併合願と独自の願、表現の違いのみで大きな差異は見られない。

以上で各經典に共通せる願文の考察が終つたのであるが、四十八願經の後半部を占める願文に関しては二十四願には全く見られない故、大經・如來會・梵(藏)本に共通する特色を考える丈に留めよう。第一に前にも述べた如く聞名思想の強調である。大經・如來會共第三十四～三十七・四十一～四十五・四十七・四十八願に示され、「聞我名字」(大經)「聞我名已」(如來會)・一願ずつずれて“*mama nāmadheyam śrutvā*”(梵本)と功德莊嚴の要因として聞名を説いている。次は二十四願經に於いて本願の対象として全く表われなかつた“他方國土の諸菩薩”に對しての願文が示されている事である。此の点について池本重臣氏は“初期大經の頃には未だ菩薩思想が発達していなかつたと考えられ、後期大經の頃には多數の菩薩を認める般若經典の出現による大乘菩薩の運動が自覺された後のこと”¹⁰⁾と述べられているが、般若經典は大乘經典の最初と言う定説から考えると、再考の餘地があるにしても、本願思想の展開として誓願の対象が單一なものから多様性を帯びて來た事は明らかである。此の部分は全てが具體的な淨土の功德莊嚴であり、思想的には決して重要な願文が含まれているわけではない。本願思想の展開として單純で少數の願文から複雑で多數の願文へと移行する發展段階が當然そこには考えられようが、單にそれ丈ではなく倫理學的見地から見ても衆生全て

が自有する自己の有限性を認知し、相対的有限的此土から理想的浄土へと求めざるを得ないような衆生の願いが浄土を益々莊嚴し展開させると言う人間の内的要因の必然的過程が強く推察される。

4

最後に各経願文の特色を考え、併はせてその成立過程について述べる。大阿經に關しては願文の配列は他譯に比して最も統一されておらず、また併合願等多少の類似點が見られるとは言え独自の願文も多い。思想的には住正定聚願・必至補處願・無諸不善願と言う高度な願文が缺けており、三輩往生の思想に代表される如く此土、浄土を問はず衆生の機根による差別が見られ、一切平等の觀念は認められない。形態的には無量壽經典中最も古い形態である事が判明する。その點平等覺經は第二十三願を除き、他は殆んど同配列で四十八願經に引き繼がれ、僅かに併合願に於いて大阿經と共通性を持つ。思想的には念佛往生願は未だ示されていないが、三輩往生としてではなく二輩の機類を説く點でより新しい思想へと移行している事が判明する。しかし成就文は願文とは相應しなく大阿經と同じく三輩思想を説いている。四十八願經に於いては願文の配列は全く同一と見てよく、思想的には三輩往生の觀念は薄れ、念佛往生願が明確に示され、一切衆生平等の往生へと展開される。更に本願思想の必然的發展により願文も増え、菩薩の多様性と聞名思想が新たに加えられ、各願文の内容も主旨は明快で高度である。四十八願經中、大經・如來會に關しては大經が表現が簡潔であり、如來會は詳細である違いで願文からはその形態の新舊を知る事は出来ない。但し成就文との關係・經典の初めに示される過去佛の遠近・五惡般の有無・各章節の移動等を考えると大經が最も二十四願經に關連性が強く、従つて如來會・梵(藏)本の方が新しい形態と考える方が妥當の如く思われる。莊嚴經に關しては全願が攝衆生願として示され、生因願としては第十三・十四願の外に四十八願經に表われた「聞名」の語が三十六願中八願(第二十七～二十九・三十一～三十四・三十六願)と多く聞名往生思想の色彩が濃く、支那譯經典では最も新しい形態とすべき如く思われる。今日に至つた浄土教史は無量壽經に關しては大經のみを對象として展開され、他譯は偶々その参考の爲に用いられる事で、その經典そのものの解釋は少ない。今回は中國・朝鮮・日本へと展開された浄土教史以前の立場で無量壽經の中心をなす本願文を取り上げ、その内容を検討した次第である。成立過程に關しては本願文のみで斷定出來得る事ではなく、經典全体から検討しなければならない事でもあり、また他の經典(般若思想の關連性を主張される諸氏もあり)との影響についても考慮すべき故、それらに關しては他の機會に述べようと思う。

(註)

- 1) 此の根據は開元釋教錄卷十四“此經前後經十一譯 四本在藏七本闕”(大正大藏經五十五卷626頁)に無量壽莊嚴經が加えられる事に依る。
- 2) 諸本の成立年代・譯出者については、推尾辨匡・望月信亨・境野黄洋・鈴木宗忠等種々論議は多い。「浄土三部經概説」(坪井俊映著)21～30頁には諸説が紹介されている。
- 3) 「本願思想の開展とその道德的、文化的、宗教的意義に就て」木村泰賢(大乘佛教概論470～490頁)
 「佛教經典成立史論」望月信亨200頁。
 「無量壽經諸異本の研究」藺田香煦
 「無量壽經の研究」森二郎(印度学佛教学研究第4卷第1号)
 「浄土佛教」鈴木宗忠73～100頁。
 「大無量壽經の教理史的研究」池本重臣
 「支那五譯對照梵文和譯佛說無量壽經序」南條文雄
 「荻原雲來文集」230～238頁。
 「浄三部經概説」33～37頁。
- 4) 「浄土教之研究」望月信亨208頁には大經四十八願名稱比較として、義寂・法位・玄一・璟興・了慧・聖聡・道隱の諸師を擧げておられる。

- 5) 流布広い大經は兎角、他譯の文字・訓讀については諸本により大いに異なっている所がある。その例として「浄土教之研究」(145~180頁)の望月信亨氏の訓讀と「浄土宗全書第一卷」に記された訓讀並びに大正大藏經の各々に示された同一經典でも多くの違いが判明する。それを梵本より類推すると益々その差は明瞭になるが校訂すべき数箇所は省略する。
- 6) 「梵本無量壽經に第十八願有無の問題」泉芳璟(佛教研究第七卷第三号 大正十五年)
「梵本無量壽經に於ける第十八願の取扱と其解釋」西尾京雄(宗學研究第五号 昭和七年)
「梵文無量壽經の因願について」泉芳璟(大谷學報第十五卷二卷昭和九年)
「大無量壽經の教理史的研究」229~232頁。
- 7) 「無量壽莊嚴經本願文について」拙論(印度學佛教學研究第十一卷第一号)
- 8) 「無量壽經義疏」(浄土宗全書五) 27頁。
- 9) 「荻原雲來文集」 260~284頁。
「大無量壽經の教理史的研究」
「無量壽經諸異本の研究」
- 10) 「大無量壽經の教理史的研究」 240頁。